

唐末の行政地理書『元和郡県図志』の編纂事情

藤 田 純 子

一 『元和郡県図志』序よりみた同図志

編纂の意図

中国の地理書の中で、総志として現存最古の書である李吉甫撰『元和郡県図志』は、体例がよく整っているために、後の総志の模範とされる。宋の楽史の『太平寰宇記』、王存の『元豊九域志』等が同図志を意識して著述されたのは周知のことであるが、そのいずれもが行政地理の書という性格をもつ点は注意されねばならない。かくいう行政地理の書とは、撰者自身の時代に即応して地理を誌し、それをすぐさま行政に資するという姿勢をもつて編纂された地理の書ということにはかならない。私は、こうした編纂の意図を充分にふまえて、『元和郡県図志』（以下『元和志』と称する）を読み、そこに著わされている李吉甫の行政への関心が具体的にどのようなものであるのかという点について、いささか考察してみようと思う。ただこの小論では、こうした私の関心の所在を明らかにする意味からまず李吉甫の『元和志』序文を中心にしてその編纂の事情を述べるにとどめた。

唐末の行政地理書『元和郡県図志』の編纂事情

『元和志』の序は、当時（唐元和期）の氣運を反映し、かつその撰次の目的をもっとも適切に伝えていると思われる。それによれば、李吉甫はつぎのように主張する。

吾が国家は、肇め貞観より開元に至るまで、夏商の職貢を兼ね、秦漢の文軌を掩い、梯航は九詔を累ね、厩置は万里に通ず。然るのち疆を分ちて以て之を弁じ、吏を置きて以て之を康んず。所有に任じて貢賦を差し、宜しき所に因りて名物を制す。その要害を守り、その走集を險るは、經理の道百王に冠たり。……天寶の季、王途暫く艱く、是れに由りて墜網解けて紐ばれず、強侯傲りて未だ肅しまず、興運に至るに速んで尽く驅除を為せり。故に蜀に阻隘の夫あり、呉に憑江の卒あり。保聚を完くし、甲兵を繕うといえども、手足裂かれて処を異にせざるなし。封疆四海を一にす。故に鄴・衛の風偃み、朔塞砥平し、東西南北、服さざるを思うものなし。臣吉甫……以為らく、当今の務を成し、将来の勢を樹てるには則ち版図・地理の切たるに若くは莫し。所以に前きに元和国計簿を上つて、戸口の豊耗を審らかにし、統けて元和郡県図志を撰して、州域の疆理を弁ぜり。時に省閥を獲、あるいは

聰明を裨せん。豈に鄴侯の規模を欲し希い、朱贛の条奏を尽すに庶からんや。況んや古今の地理を云うもの、凡そ数十家なるも、古遠を尚ぶもの、あるいは古を搜して今を略し、謡俗に採るもの、多く疑を伝えて実を失ない、州邦を飾りて人物を敘し、邱墓に因りて鬼神に徴し、異端に流れて根要に切なるもの莫し。兵饑、山川、攻守、利害に至るまで地理に本ずくるものは皆略して書せず。將た何をもってか明王を佐めて、天下の吭を扼して、羣生の命を制し、地保勢勝の利を収めて、形東壤制の端を示さん。此れ微臣の精研する所以にして、聖后の宜しく周覽すべき所なり。

と。彼は地理の書が政治に資するために必要不可欠であることを信じ、それが政治に効用をもたない地誌に墮してはならないことを力説する。そこで「古を搜して今を略し、謡俗に採るものは、多く疑を伝えて実を失ない、州邦を飾りて人物を敘し、邱墓に因りて鬼神に徴し、異端に流れて、根要に切なるもの莫し云々」と、それまでの地理書が現在地を省略したり、事実からかけへだたっていたり、わけでも政治的要請に密着しないものが多いことを批判する。彼はさらにつづけて「兵饑、山川、攻守、利害のこと」など地理に附随すべきものが従来の地理書には欠けていることを指摘しているが、それは兵糧、山川の要害など戦略上究知しておかねばならない地理的条件の記載の欠除を意味しているよう。彼が地理書に備わるべき基本的条件として、現在に即応した事実の記載、行政に効用をもたらす内容を求める立場をとっていることは明瞭である。そしてもっとも主

要な主張は次の点にあった。

彼は当今の急務、将来の勢力樹立のためには版図、地理より適切なものはないとして、『元和志』撰次にさきだつて『元和国計簿』（以下『国計簿』と称する）を作成したことを述べ、同書は「戸口の豊耗を審らかにする」ものであり、『元和志』は「州域の疆理を弁らかにする」ものと説明している。『国計簿』は版図、『元和志』は地理に対応して、この両書は単独に存在するものではなく、あい関連して行政に資すべき書であるという。これは当代の戸籍、兵籍、税収等の状況を記録した『国計簿』を地理書である『元和志』ときり離して考えてはいないことを示しており、それは戸口の存立および財政の基盤である地理的条件をより具体的に把握することが行政によりよい効果をもたらすであろうことを信じていたためである。このように『国計簿』と『元和志』が撰者の意識の中で密接な関連をもつて結びつけられているのは注意されてよい。『元和志』が天下四十七鎮の地図をもち、地理を誌すと同時に財政にかかわる記事をも刻明に記述しているのは、彼の関心が行政の中でもとくに財政に密接して存在していたことをあらわし、そこに『元和志』編纂の目的があつたと考えられるのである。

さて、李吉甫におけるこのような考え方は、同時代人である杜佑に共通性を求めることができる。杜佑の『通典』は、彼自身の政治理念を著わした書で、単なる制度の沿革を述べたものではない。彼の政治に対する考えはその篇目の次第を述べたところに示されている。そこで彼は、「理道の第一は教化であり、教化の本は衣食を充足させるところにある」として、『易』、

『書』、『管子』を引いて、政治の基本は『食貨』にあると述べている（『通典』卷一）。そして『通典』の篇目として食貨、選舉、職官、礼、樂、兵、刑、州郡、辺防の九門を設けているが、食貨をその第一に置いたのは、政治の根本は何かということとを端的に示している。彼はまた州郡門においても、地理が行政に資すべきであるという姿勢をもってそれを誌したのであった（『通典』卷一七二）。その生涯の大半を財務官僚として過した杜佑が、自己の政治理念の基本に食貨（財政）をすえているのは当然の帰結であった。杜佑と李吉甫を比較し、細かく検討を加えたならば、財政に対する基本的認識にあるいは相違するところがあるかもしれないが、財政を重視するという点で両者は共通の基盤に立つものであったと考えられるのである。

このような政治に対する考え方は、当時の社会の変化と無縁のものではない。礪波護氏は、唐朝は兩税法の採用によってそれまでの武力中心の国家から財政国家へ変貌したとされ、これは何よりも財政経済を優先させる国家の出現を導くものであったとされた。また官制の面から、唐後半期から顯著になつていく令外の官たる諸使職のうち、度支・塩鉄使が重要さを増し、それが宋代に至つて三司使となり、政治は財政経済を中心として運営され、三司使が中央政府の中で中核的存在になることを指摘しておられる。杜佑や李吉甫の政治意識をこのような国家体制と社会の変化に対応した面よりみるならば、紋上の体制を内側から支えていく行政官僚、あるいは政治家の意識の変革としてとらえることができる。ともあれ、李吉甫は行政に資するという姿勢をもつて地理書を編纂したが、その行政への関心は

財政にあつたというのが、彼の『元和志』序にあらわされた主張の主要な論点であらうと考えられる。

二 財務官僚としての李吉甫

李吉甫は元和二年（八〇七）相位について以来、人材の登用、官界における綱紀の刷新などを行なうが、その代表的な政策は、杜黃裳とともにとつた強藩抑臣策であり、官僚とその俸料の整理削減策で、この二つは唐朝の支配権回復の目的にそつた政策といえるであらう。

憲宗はその即位（八〇五年）と同時に杜黃裳を、ついで李吉甫を登用して、代宗、徳宗時代の強藩に対する姑息政策から武力をもつて藩鎮の独立化を阻止するという積極政策に轉換した。この強藩抑臣策を強力に推進した結果、元和二年から三年の間に、西川の劉闢、夏綏の楊惠琳、浙西の李錡らの反乱をつぎつぎ平定して、この方面における唐朝の支配権を回復した。

この政策の成功は、他の多くの藩鎮に動搖を支え、このうち唐朝は河北、淮西の諸鎮をもあるいは帰順させ、あるいは討伐することに成功する。

元和三年に行なわれた裴垍の財政改革、また同五年の烏重胤の軍事策は、李吉甫らによる強藩抑臣策の推進によつてその効果をあげたのであり、財政面からも節度使の権にある程度の掣肘を加えることができた。

李吉甫はまた元和六年（八一二）には官員の整理と俸料の削減策を建議した（『新唐書』本伝、『通鑑』卷二三八）。それによると、『天寶以後、宿兵數十余万、その他の商賈、僧、道士

となつて農業に従事しないものは十人の中、五、六人になる。

これは常に三割の労働に従う者が、七割の待衣坐食の徒に奉仕している有様である。現在内外の官僚数は万員を下らない。また州数は三百余（『通鑑』では三百余県となつてゐるが、『元和志』所載の州数は欠卷部分を除いても三百州に近い）、県は千四百にのぼり、県が州となり、郷が県となるものが甚だ多い」と当時の情況を指摘しているが、多数の兵数は無論のこと、納税忌避の手段であつた僧、道士となるもの、官僚、冗官の増加、地方の行政区画の細分化によつて必然的におこる財政上の諸負担を吏員の省減、入仕者の制限、州県の併合によつて問題解決をはかるべきことを要請している。なかでも官の俸料については、大曆中常袞は裁限をたて、貞元年間には李泌が職官の閑劇を斟酌して量定するなどの手直しが行なわれてきたが、これらの改革を経てもなお、「名のみ存して職の廢されたもの」、「額を去つて俸のみ存する」という矛盾があつた。これらについて検討を加えて俸料、雜給を量定すべきことを奏請した。この建議にもとづいて給事中段平仲、中書舍人韋貫之、兵部侍郎許孟容、戸部侍郎李絳らが詳定を行ない、この結果、冗員八百員、吏千四百員が整理された（『新唐書』本伝）。軍事費とともに財政圧迫の原因であつた官僚の増加、有名無実化した官の存在による俸料の膨張に対してその整理削減策が実施され、財政負担の軽減がはかられたわけである。

一方、李吉甫は地方政治に対しても意を用いた。彼は貞元八年（七九二）寶參に連坐して明州長史に左遷されて以来、永貞元年（八〇五）中央へもどるまで十数年間を地方官として過し

たが、その間「閭里の疾苦を究知し、常に方鎮の彊恣を患う」るところであつたから、中央へ復帰し宰相に任用されるとすぐ「屬郡の刺史をして自ら政を為すことを得しむれば、すなわち風化成るべし」（『新唐書』本伝）と憲宗に進言し、州刺史として郎吏十余人を地方へ出し、節度使に掌握されていた地方の行政権の回復をはかつた。

元和三年（八〇八）九月から同五年十二月まで淮南節度使として揚州に赴いた彼は、この地において農民保護、農業施設の整備につくしている。まず通租数百万を蠲免し、富人、固本二塘を築いて田二万頃に水をひき、平津渠を築いて漕渠の漏水を防いだという（『新唐書』本伝）。

また同年には涪州が三百里の黔府に属さず、一千七百余里を距てた江陵に所属しているという疆理の制の矛盾をついた。涪州民は輸納には難所である三峡路を通過しなければならなかつたが、この労苦を軽減するために涪州を黔府に所属させるべきであると奏請した（『元和志』卷三〇）。

これまであげてきた二、三の例だけが李吉甫の治政のすべてではないが、彼の治政の基調に一貫しているのは、唐朝の支配権の回復である。そしてこれを推進していくうえで必要不可欠である財政に対する配慮を彼はもっとも重視していたと考えられる。

憲宗朝の強藩抑圧政策の成功によつてこの時期は中興期と称されている。それは一時的に唐朝の支配権の回復が実現したからなのであるが、彼はこの政治上の目的を保持主張し、これを推進するためには財政的裏付けが必要であることを十分に自覚

していた。彼が一貫して財政に対して深い関心をもっていたのは、唐朝の支配権の回復という強い政治的要請が背景となっており、またこれは財政を無視しては成立しなかったのである。

だが藩鎮に対する用兵に反対する官僚は、主戦派李吉甫をたびかさなる調発を行なつて、天下を疲弊させたと非難した。唐朝の支配権回復を目的として強藩抑圧策を推進していくかぎり、財政上に占める軍事費の量は膨張せざるをえない。憲宗期における莫大な軍事費支出はつぎの穆宗朝にいたつて財政破綻をきたし、財政危機を回避するために穆宗は鎔兵の密詔を下し、軍事費削減をはかるのである。憲宗期の積極的な政治から生み出されてきた種々の矛盾が次代に大きく影響している。この点から逆に憲宗期における李吉甫の治政を考えてみる必要がある。

この章では『元和志』の撰者李吉甫を単なる行政官僚としてみるのではなく、財政に対する関心度の深さに照して、財務官僚としてとらえることを試みたわけであるが、充分にその像を描出することができなかった。いずれ稿を改めて、この点の考察を深めたいと考えている。

三 『元和郡県図志』の構成

『元和志』の構成は、李吉甫が同図志序で述べているように、地図一卷、志四十卷、目錄一卷、併せて四十二卷より成っていた。地図は鎮毎に作成され、毎篇首に付されていたという。しかし宋の程大昌が指摘しているように宋代にはすでに佚亡していた。志の部分も若干の巻数が失なわれ、現在みるこ

ができるのは三十四卷で、卷一九（河北道の一部）、二〇、二三（兩卷とも山南道の一部）、二四（淮南道）、三五、三六（兩卷とも鎮南道の一部）および卷一八の教葉は失なわれている。

このため清朝になってから欠卷欠葉を補う努力がなされ、周夢棠、繆荃孫、戴覲らが逸文を輯め、また補志を作った。さらに張駒賢は本文の考証、校訂を行なっているが、これらについては平岡武夫氏が『唐代の行政地理』に詳しく述べておられるので、ここではふれない。

さて四十七鎮毎に作成され、篇首に付されていたという地図は見るべきでないが、その大体的内容を予測する手がかりはある。李吉甫と同時代の宰相であった李絳の「論魏博事」（『李相国論事集』卷五）の中につぎのような記載がある。

李吉甫遽かに用兵之策を進め、具さに入兵の道路、攻討の利病を圖画し、並びに河北の土田、平易、沃壤、桑柘、物産繁富之状を載す。

と。これは『元和志』の図とは別に作成されたものであるが、『元和志』の地図も鎮毎の要害、道路、土田、桑柘、物産等々が画かれたものであらうと想像することはできる。この「論魏博事」に記載されている地図はむしろ『新唐書』本伝に載る「河北の險要所在図」を指していると思われる。これは魏博節度使に対して終始用兵策を主張した李吉甫が、憲宗に上つたものである。憲宗はこの図を浴室の門壁に張り、河北の事を議する毎に、必ず李吉甫を指して「朕、日々図を按ずるに、信に卿、料るが如し」と云つたとあるが、河北討伐の作戦案が李吉甫の作成した地図にもとずいて論議されていたことを示して

いる。そして地図が政治的効用を十分にそなえ、その効果を發揮していったことが、この例によって確認できるのである。

ついで志の内容についてみると、京兆府より隴右道に至るまでの十道を四十七鎮の管轄にわけて、所屬の府・州・県の沿革、府・州境、上都、東都への里程数、四至八到の記述がなされているが、その特色はほぼつぎの点にある。州ごとに開元と元和の戸・郷数、貢賦の種類を刻明に記していることである。この兩時期を対比することによって、元和時の現実をより鮮明に表わそうと意図していた。第二は古今の地理の沿革を述べるにあたって、灌漑施設、溉田の状況、水陸運米数、輸送の経路等の問題について注意をはらい、当代はもとより漢、魏、後魏、北周、北齊、隋等に遡って言及を試みていることである。

さらに藪沢、河渠、塩冶、関津橋梁、道路、駅伝、倉庾、監牧、鎮、營寨等々の記載、刺史のその時々行政報告や施策に関する奏請についても、その記載をおろそかにしてはいない。これは前述したように撰者李吉甫の関心がとくに財政に密接して存在していたことをものがたるものである。その他本文の敘述は行政地理の書として必要な事項が盛りこまれており、唐朝の地方支配の現状を概括的に再現しえていることも指摘しておきたい事柄である。

『元和志』の地図と志について概括してきたが、撰者李吉甫が地理書に求めた政治的効用性は同図志の中に反映されている

といつてよいであろう。そして唐の支配権の回復という当代の政治的要請に密着した問題として財政が行政の中で非常に大きな比重を占め、この運営に地図・地誌など地理書が重要視されていたことを『元和志』編纂の事情を考察していく中で確認することができた。

ただ『元和志』の内容は、これまでのべてきたように政治的財政的な面のみをもつものではないことは当然である。もっと多方面からの考察が必要であり、異なった角度から光をあてることによって、色々な要素が析出され、それによってこの書の内容がより豊かな成果を生み出す方向へと導いてくれるであろう。

註

- ① 礪波護「三司使の成立について―唐宋の変革と使職―」（『史林』四四―四、一九六一年）、「律令体制とその崩壊」（『中国中世史研究』所収、東海大学出版会刊、一九七〇年）参照。

- ② 松井秀一「裴垍の財政改革について」（『史学雑誌』七六一七、一九六七年）参照。

（これは昭和五十年文部省科学研究費補助金「奨励研究」Aの交付による研究成果の一部である）